

河原典史 編

『カナダ日本人漁業移民の見た風景 前川家
「古写真」コレクション』

三人社 2013年3月 197頁 2,800円＋税

本書は、近代期のカナダへの漁業移民に関する調査研究に取り組んでいる河原典史が、カナダ日本人漁業移民の1家である前川家に関する古写真や回想録を編集したものである。本書は、カナダにおける日本人移民史や漁業史に関する、純粋な学術研究書とは異なる。しかし、本書では、カナダへ移住した日本人の一家族の成長を通じて、学術研究書では十分検討されてこなかった移民の生活の実態が明らかにされており、移民史や漁業史研究にとって大変独自性に富み意義深い成果となっている。

はじめに、本書の構成と内容の概略を紹介する。

刊行によせて

家族の思い出（山口静代）

Maekawa Photographs of Ucluelet (Stanley T. Fukawa)

解説

前川家コレクション—バンクーバー島西岸の漁業開拓者たち（河原典史）

前川家写真コレクション

- I 前川家のふるさと
- II バンクーバー・キャナリーの人々
- III ユークレットの漁業開拓
- IV ユークレットの前川家
- V ユークレットでの学び
- VI ユークレットの若者たち
- VII 1936年の建国記念日（ドミニオンデー）の集い
- VIII レモンクリークでの生活
- IX ロードキャンプでの様子

回想録

無名の勇士（前川佐一郎）

1942年以前のユークレットの日本人漁業コミュニティ（前川 S. ラリー）

The Japanese Fishing Community of Ucluelet Pre-1942 (Larry S. Maekawa)

資料編

地図 カナダにおける前川家の活動地

地図 前川家のふるさと

年表 前川家の歴史

家系図 前川勘蔵をめぐるファミリー・ツリー
（第二次世界大戦以前）

新聞記事 船英一路『晚香坡島西海岸を訪ねて』（大陸日報より）

古写真との出会い—おわりにかえて（河原典史）

まず、「刊行によせて」では、前川家の当主勘蔵氏の長女であり、大正12（1923）年にカナダで生まれ、昭和21（1946）年までカナダに居住していた山口（旧姓・前川）静代氏と、カナダ日系博物館のスタン府川氏の2人より、序文が寄せられている。

次に、「解説」では、編者である河原により、バンクーバー島西岸の日本人漁業移民と、前川家の概要についてまとめられている。カナダでは、ブリティッシュコロンビア州の大河川の河口部に多数のサケの漁場やサケ缶詰工場が成立し、多数の日本人漁業移民がこれらの労働に従事していたが、大正前期より生産量が落ち込んでいた。大正8（1919）年、和歌山県日高郡三尾村出身の上出邦蔵が、バンクーバー島西岸の沖合に大きなサケの漁場を発見して成功したことを契機に、バンクーバー島西岸への日本人漁民の移住が相次いだ。また、前川家について、当主勘蔵氏は明治15（1882）年に和歌山県東牟婁郡西向村（現、串本町（旧、古座町））古田地区で生まれ、明治32（1899）年にカナダへ単身移住した。その後、家族を呼び寄せ、大正13（1924）年にはバンクーバー島西岸へ移住し、昭和17（1942）年に第二次世界大戦に伴う強制移住のため内陸部のレモンクリークに移住した。昭和21（1946）年、前川家の長男であり、静代氏の兄である前川佐一郎氏を除き、前川家はカナダから帰郷した。

続いて、「前川家『古写真』コレクション」は、前川家の家族の成長に沿って、経年的に古写真が収録されている。なお、本書に収録された古写真は、山口静代氏の序文によれば、「日本に残した両親へ子供たちの成長を知らせよう」（i 頁）として、勘蔵氏の妻であり静代氏の母である前川よ志彥氏が撮影し残したものである。「I 前川家のふるさと」では、前川家の家族の集合写真や故

郷周辺の風景、横浜とバンクーバーの移動手段であった氷丸丸の様子が判明する。また、前川よ志系氏の渡航許可証も収録されており、古写真と並び資料的価値が高い。「Ⅱ バンクーバー・キャナリーの人々」では、前川家がバンクーバー島西岸へ移住する以前の暮らしの様子が判明する。とくに、本書に収録された古写真の中でも古い明治43(1910)年頃の船大工を撮影したものや、大正6(1917)年の造船所の様子を撮影したものも含まれている。また、共同国民学校での集合写真には、白人と日本人が同じ学校で学んでいた様子がわかる。

「Ⅲ ユークレットの漁業開拓」から「Ⅶ 1936年の建国記念日(ドミノンデー)の集い」にかけては、前川家がバンクーバー島西岸にあるユークレットへ移住した後の古写真が収録されている。「Ⅲ ユークレットの漁業開拓」は、トローリング漁船が多数係留されている様子や造船所、湾上に浮かぶ漁者組合の建物等、当時の日本人漁業移民の漁業や集落景観が判明する。「Ⅳ ユークレットの前川家」は、前川家の子どもたちの成長や、ピクニックをはじめ家族の行事の様子がわかる。これらの古写真は、山口静代氏の序文を踏まえると(i頁)、撮影した前川よ志系氏が最も残しておきたかった古写真と位置づけられる。「Ⅴ ユークレットでの学び」では、日本語学校によるサマーキャンプ等の学校行事や、ピクニックといった家族の行事をはじめ、教育や娯楽の様子が判明する。さらに、婦人会による手芸サークルといった活動も写されており、日本人女性だけでなく少数ではあるが白人女性も参加していたこともわかる。「Ⅵ ユークレットの若者たち」では、成年男女の交流や、季節労働にきた女性たちが示されている。「Ⅶ 1936年の建国記念日(ドミノンデー)の集い」では、昭和11(1936)年7月1日のカナダ建国記念日において、競泳や漁船競争、日本舞踊といった催しにたくさんの日本人移民の集う様子が判明する。

「Ⅷ レモンクリークでの生活」と「Ⅸ ロードキャンプの様子」は、昭和17(1942)年にレモンクリークへ強制移住させられた後の古写真が収録されている。これらの古写真から、強制移住先においても、移住者の間で、パーティやピクニック、カルタ大会をはじめ、さまざまな交流がみら

れたことがわかる。なお、本書には、昭和20(1945)年に撮影された古写真まで収録されている。

さらに「回想編」では、前川勘蔵の長男である前川佐一郎による、「前川佐一郎」名義にて平成12(2000)年に日本語で書かれた父勘蔵氏の経歴に関するものと、「Rally S. Maekawa」名義にて平成21(2009)年に英文で書かれた自身のカナダでの体験に関するものの、2つの手記が収録されている。

最後に、「資料編」では、前川家の移住先に関する地図や家系図に加え、昭和11(1936)年にカナダの日系新聞である『大陸日報』に連載された、バンクーバー西岸の日本人漁業移民の生活を取材した新聞記事を収録している。

本書を通じて、まず、古写真や手記という、従来の文献史学では十分検討されてこなかった資料を通じて、カナダ日本人漁業移民の生活の実態を明らかにした点が注目される。河原は、本書をはじめとする一連のカナダ日本人漁業移民研究の目的ついて、「文献史学をはじめとする先行研究との差別化を目指し」(194頁)、「行政文書やオーラルデータに過大に依拠してきたカナダ移民史研究に対して、本書で活用した資料、とくに古写真からの検討は今後のカナダ日本人移民史への試金石でありたい」(vii-viii頁)と記していた。そして、古写真を検討した結果、カナダ日本人漁業移民の開拓の過程を可視的に明らかにするとともに、日本語学校をはじめ教育環境が整備されていたことや、ピクニックや婦人会の手芸サークルをはじめ家族や学校、地域社会でさまざまな娯楽が存在したこと等、詳細な生活の実態が解明されていた。さらに、山口静代氏の序文や前川佐一郎氏の手記をあわせて検討した結果、白人による日本人への排斥が経済的な状況に応じて変動がみられたことや、白人の中には排日家だけでなく親日家も存在したこと、日本人の漁民と仲買商との間でも対立がみられたことも明らかにされた。これらの成果は、河原の批判する「行政文書やオーラルデータに過大に依拠してきたカナダ移民史研究」(vii頁)に対し、古写真や手記といった地域住民が直接作成した資料を活用することで、「排斥する側として一様にとらえられることの多かった白人についても、排日家・親日家双方からのまなざし」(vii

頁)の再考の提唱や、「パイオニアとしての賞賛、あるいは排斥に堪えるカナダ日本人漁業者という短絡的な説明だけではうかがいきれない生業史」(vii頁)の解明に成功したといえる¹⁾。

このような本書の成果は、山口静代氏に和歌山県へ帰郷後「誰にも話すこともな」かったカナダでの経験を語る機会を設定し(i頁)、さらに古写真の開示へとつながった、河原による丹念なフィールドワークのたまものといえる。本書は、たんにカナダ日本人移民史に新知見を提示したのみにとどまらず、聞き取り調査や地域住民の直接作成した資料の収集による生活の実態の復原という歴史地理学特有のフィールドワークが、文献史学をはじめ隣接諸分野では捨象されてしまう地域住民の視角に立ち新知見を提示しうることを、河原が実証したものと評価できる。

また、本書に収録された古写真には、すべて英文キャプションが付されている点も注目される。近年の人文諸科学では、文献資料にとどまらない、絵画や民具、そして本書で注目された古写真をはじめ、さまざまな非文字資料への研究対象の拡大や資料論の充実が進められている。本書では、移民の古写真という、国際性をもつ非文字資料に注目している点で、既存研究を一步先へと展開させている。

一方、古写真という資料の特性について、より詳細に検討していきたい。「前川家『古写真』コレクション」のうち、「IV ユークレットの前川家」に収録された前川家の家族写真は、前川よ志系氏が故郷の両親にみせるため撮影した家族の成長の証であり、前川家にとって家宝ともいえる古写真群と位置づけられよう。調査論の視角でみれば、これらの家族写真は、河原の提唱する調査法である、インフォーマントの記憶を呼び戻すための「装置」として最も有益な資料となりうる²⁾。しかし、前川家の家族でもなく、カナダ移民史や漁業史に関する調査研究に従事していない読者が、前川家の家族写真をみた時、貴重かつ興味深いものであると直感的に感じるものの、どのように資料的価値をみいだせばよいか判断がつきにくかった。

そもそも、前川家の家族写真に限らず、古写真の多くは、あくまでプライベートな思い出を残すために撮影された性格をもつ。このため、被写体

の多くは、家族を中心とした人物が中心となることが多い。このような古写真の特性を踏まえ、本書では古写真にみえるさまざまな人物の集合のあり方に注目することで、カナダ日本人漁業移民の生活において教育や娯楽が充実していたことや、排日感情と親日感情の混在等が明らかにされ、排斥史観に依拠したカナダ移民史研究に対し新知見の提示につながっていた。また、本書の研究視角以外にも、人物の服飾や髪型といった風俗や、人物の背景にみえる景観等、さまざまな検討も展開しうる。つまり、本書に収録された古写真は、カナダ日本人漁業移民の移民史の側面について検討する上で、大変有益な資料となっていた。ただし、古写真を通じて、カナダ日本人漁業移民の漁業史の側面を検討しようとしたとき、たとえば、最も把握しておきたい内容の1つである日本人漁業移民による漁業の実態に注目しようとすると、造船所の様子や漁船の停留する入り江の様子が収められており、漁船の構造や規模、船舶数等から漁業の一端を把握することができたが、十分明らかにされていなかった。

さらに、本書に収録された古写真の撮影年次について、最も古いものは明治43(1910)年に撮影されていたが、大半は大正中期以降に撮影されたものであった。一方、前川家は明治32(1899)年に当主勘蔵氏がカナダへ移住してカナダでの生活基盤の整備を開始しており、大正13(1924)年には家族でユークレットへ移住していた。また、写真機は、家計がある程度安定しなければ購入されにくいと推察される。つまり、本書に収録された古写真は、あくまで前川家の家計がある程度安定してきたとみられる、大正後期以降の様子を撮影したものであった。このため、前川家がカナダにおける生活基盤を確立していった時期にあたる、明治中期から大正前期における生活変化については、古写真がほとんど存在せず十分明らかにすることができない。

これらの課題をめぐって、本書では、古写真とあわせて収録された、前川佐一郎氏による2編の手記や新聞記事を通じて、前川勘蔵氏のカナダへの渡航からユークレットへの移住と漁業の拡大といった、前川家を中心としたカナダ日本人漁業移民による漁業開拓の展開が詳細に明らかにされていた。また、河原の他の研究では、前川家と

同じくバンクーバー島西岸に居住し、塩ニシン製造業に従事していた嘉祥家の古写真をはじめ、家族写真としての性格が弱く、漁業の様子を中心に撮影した古写真の存在が確認され、すでに検討が進められている³⁾。このように、評者が指摘するまでもなく、古写真の資料的限界について、本書や河原の研究ではすでに十分配慮されていた。

以上を踏まえ、古写真を用いることで、河原の指摘する通り、行政文書やオーラルデータに依存した文献史学とは異なる、移民の詳細な生活実態を明らかにすることができる。しかし、河原もすでに配慮していたが、古写真によってはあくまで家族写真としての性格が強いために生業をはじめ検討しにくい内容があることや、古写真という資料の残存する時期の限定といった、古写真にはさまざまな資料的制約も存在していた。本書において、河原は、古写真の検討を通じた、移民史研究における文献史学との差別化と、歴史地理学の独自性の確立をめざしており、大変意欲的な取り組みとして注目される。評者は、河原自身も課題に挙げていた、「カナダ日本人漁業移民史を再検討し、それを編む」(viii頁)ことで、歴史地理学の視角から独自性をもつカナダ日本人移民史や漁業史の体系的な学術研究書が発表される機会を待ち望んでいる。

(花木宏直)

[注]

- 1) このような問題意識や、問題意識にもとづく研究成果は、主に以下の論考に詳しい。①河原典史「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開—和歌山県出身の船大工のライフストーリーから—」立命館言語文化研究17-1, 2005, 59-74頁。②河原典史「カナダ・バンクーバー島西岸への日本人漁業者の二次移住—クレヨコット・トフィーノ・バムフィールドを中心に—」(米山 裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動 在外日本人・移民の近現代史』人文書院, 2007), 147-171頁。③河原典史「『前川家コレクション』にみる女性と子供たち—カナダ・バンクーバー島西岸の日本人」京都民俗28, 2011, 111-130頁。
- 2) 河原典史「日系カナダ移民のライフストーリーをめぐる調査法の再考—実証的な生業研究にむけて—」立命館言語文化研究17-4, 2006, 3-20頁。実際に、本書における山口静代氏の序文には、古写真をみながら、被写体の内容にとどまらない、さまざまな記憶を連関して想起していく様子が、以下の通り記されている。「写真を1枚1枚眺めると、日本人だけでなく白人のことも思い出されます。私たち日本人に土地を提供してくれたフレーザー老人、やせていたので骸骨をもじってあだ名をつけた小学校の先生……その『コツコツ先生』には、授業中に日本語を話すとよく怒られました。また、インディアンは工芸品を作り、私たちに物々交換を依頼しにきました。彼らは鳥葬をし、お葬式では泣きばばあが参席していたことも記憶しています」(i頁)。この記述から、河原の調査法が有益であることが実証されている。
- 3) 河原典史「1920年頃のカナダ・バンクーバー島西岸におけるニシン漁業の漁場利用—調査報告書と古写真から—」国際常民文化研究叢書1, 2013, 173-184頁。